ヨハネ福音書は、20章で終わっても良さそうです。21章はなぜ書かれたのか。文脈上の位置付けは何なのか。

ASSISTANT

ヨハネ福音書の21章についての質問ですね。ヨハネ福音書は、新約聖書に含まれる4つの福音書の一つで、キリスト教の重要な文献です。20章で終わるかのような印象を受けるのは確かですが、21章が存在することには特別な意味があります。

ヨハネ福音書20章では、イエス・キリストの復活と、その後に弟子たちへの出現が記されています。この章は、イエスの使命の完了と、新しい信仰の始まりを示唆しているため、一種の結論と見なすことができます。

しかし、21章が追加されている理由には、いくつかの説があります：

1. **補足的な教訓としての役割**：21章は、ペトロと他の弟子たちとのイエスの出会いを描いています。この章は、ペトロの三度の否認を補う形で、三度の「愛しているか」という質問を通じて、ペトロの信仰と彼への使命の再確認を描いています。このやり取りは、リーダーシップと赦しに関する重要な教えを提供しています。
2. **教会へのメッセージ**：21章は、初期キリスト教会への具体的なメッセージを含んでいると考えられます。ペトロへの指示は、教会の指導者たちへの指導原則として解釈されることが多いです。
3. **伝統的な結びつき**：一部の学者は、21章が後の時期に追加された可能性を指摘しています。この追加が、伝統的な教えや共同体のニーズに基づいて行われた可能性があります。

文脈上の位置付けとしては、21章はヨハネ福音書の物語に深みを加え、イエスと弟子たち、特にペトロとの関係に焦点を当てています。また、キリスト教会の初期段階でのリーダーシップのモデルとしての役割も担っています。

ヨハネ福音書全体としては、イエス・キリストの神性と人間性、そして彼の教えの永続性に重点を置いており、21章はこれらのテーマを補強し、初期キリスト教共同体への具体的な指導を提供する役割を果たしています。

ヨハネ福音書は大祭司としてのキリストを表していると考えます。大祭司は、言い換えると大牧者。その大牧者が弟子たちを訓練し育てて、弟子たちが牧者として教会を導けるようにする。最終章は、大牧者が牧者に使命を託す。

ASSISTANT

あなたの解釈は、ヨハネ福音書の最終章が持つ深い神学的意味合いを捉えています。キリストを大祭司あるいは大牧者として見るこの視点は、特にヨハネ福音書の特徴的なテーマとよく合致しています。

ヨハネ福音書では、イエス・キリストはしばしば、人々を導く牧者として描かれています。大祭司としての役割は、旧約聖書における大祭司の役割に根差しており、人々を導き、彼らに教えを与え、そして最終的には自らを犠牲にして彼らの救済を成し遂げることを意味しています。この観点から、21章でのイエスとペトロとの対話は特に重要です。

21章では、イエスがペトロに三度、「私の羊を飼いなさい」と言っています。これは、ペトロと他の弟子たちに対する牧者としての役割と使命の委ねと見ることができます。イエス（大牧者）は自らの地上での役割を終え、その使命をペトロ（牧者）に託しています。これにより、ペトロと他の弟子たちは、キリスト教会の初期段階で牧者としての役割を果たすことになります。

この章は、初期キリスト教会における指導者たちの役割と責任についての強力なメッセージを提供しています。大祭司としてのキリストは、自らの使徒たちに、彼の教えを守り、共同体を導く責任を託しています。これは、キリストが教会を通じて、世界中の人々に影響を与え続ける方法を示しています。

このように、ヨハネ福音書21章は、単に物語の結末を追加するだけではなく、キリストの大祭司としての役割と、彼が設立した教会の使命と目的についての深い理解を提供しています。これはヨハネ福音書全体のメッセージを補完し、キリスト教信仰における中心的な教えを強調しています。

もう1人、主が愛された弟子であるヨハネは、大祭司として天の至聖所の幻を見るというのが、ヨハネの黙示録ではないかと考えます。

ASSISTANT

あなたの考えは、ヨハネの黙示録（または『黙示録』とも呼ばれる）の神学的な解釈において非常に興味深いものです。『黙示録』は、新約聖書の最後の書であり、ヨハネによって書かれたと伝えられています。この書は、象徴的で幻視的な言葉を通して終末論的なビジョンを描いています。

『黙示録』において、ヨハネは天の幻視を見ることが語られており、これは彼が天の至聖所、すなわち神の直接的な臨在がある場所を視たことを意味しています。ヨハネが受けた幻視は、神の計画、最後の審判、そして新しい天と新しい地に関するものであり、キリスト教の終末論的な教えの基礎を形成しています。

あなたが指摘するように、ヨハネがこのような幻視を経験することは、彼がキリスト（大祭司）に特別に近い存在であったことを反映している可能性があります。ヨハネ福音書で言及される「主が愛された弟子」としての彼の地位は、特別な啓示を受ける彼の能力と深く関連していると考えることができます。

ヨハネの黙示録におけるビジョンは、キリストが天の至聖所において大祭司としての役割を果たしていることを象徴していると解釈することもできます。キリストは神と人間との間の仲介者として、永遠の救済と神の国の実現を約束しています。

このように、ヨハネの黙示録は、キリスト教の終末論的なビジョンと、キリストの大祭司としての役割を理解する上で、重要な文書です。ヨハネが経験した幻視は、キリストの教えと彼の神的な権威を強調し、信者たちに希望と確信を与えるものとなっています。